

## ゴルテュン方言における語末の *-vs* と 動詞のアクセントについて

松浦高志

古典期以前のゴルテュン方言は、*τους ἐλευθερους* 「自由人たちを」 (*IC* IV.72.VII.7–8) における例に見られるように第2代償延長が起こっていないことで知られる\*1。また、語末の本来の *-vs* と、\**-vts* から第二次的に生じた語末の *-vs* に含まれる *v* は、次の語が子音で始まっていれば前にある母音を延長せずに脱落し、次の語が母音で始まっていれば脱落しない、とされ、これはギリシア祖語時代と同様であると考えられている\*2。これによりゴルテュン方言では *τους ἐλευθερους* と *τος καδεστανς* 「母方の親類たちを」 (*IC* IV.72.III.50–51) に含まれる *τους* / *τος* のように2つの形態が併存している場合がある。ただし語末の *-vs* に含まれる *v* が脱落する条件は明確に述べられているとはいえない。Buck によれば「次の語と密接な関係がある場合」とされ、Lejeune によれば「連続的に発音される場合」とされるが不十分である。実際にはこの脱落はアクセントによって規定されると考えられる。すなわちアクセント上ひとまとまりとなっている単語群 (accentual unit) の内部では起こるが、外部では起こらないと考えられる。

ある単語がアクセント上ひとまとまりとなっている単語群を成しているかどうかは、外連声 (external sandhi) が起こっているかどうかでわかる場合がある。たとえば *ἐδ δικαστεριον* (*ēs* < *évs*) 「裁判所に対して」 (*IC* IV.72.XI.15–16) では後接辞である *ēs* が外連声により子音同化が起こって *εδ* となっている。ゴルテュン方言では音素の組み合わせが次の場合に外連声が起こる。(a) *-s δ-* > *-δ δ-* (15 x), (b) *-p δ-* > *-δ δ-* (5 x), (c) *-s θ-* > *-θ θ-* (1

\*1 母音間の「σ + 流音または鼻音」ではσが失われて前の母音が延長されることがある。これを第1代償延長という。アッティカ・イオーニア方言で第1代償延長は \*ā から η への変化 (これは紀元前1000年頃から起こったと考えられる) より前に起こっている。ゴルテュン方言でも第1代償延長は起こっている。たとえば *ἡμην* (< \*esmēn, Att. *εἶναι*) 「～であること」 (*IC* IV.41.I.3)、*ἐς κερανς* (< \*g<sup>h</sup>es-r-, Att. *χείρας*) 「手の中に」 (*IC* IV.72.I.27, 35)。また、母音間の *-vo-* と、母音の後かつ語末の *-vs* では *v* が失われて前の母音が延長される場合がある。これを第2代償延長といい、これがアッティカ・イオーニア方言で起こったのは \*ā から η への変化より後である。第2代償延長の後に起こったと考えられる第3代償延長についてはここでは関係ないので省略する。以上についての最近の初心者向けの解説としては Rau, 177–178 がある。なお、ゴルテュン方言のアクセントは不明であるのでアクセント記号は原則として省略し、長音記号も省略した。略号は原則として Liddell, Scott, and Jones (= LSJ) と Glare にしたがったが、*Inscr. Cret.* の代わりに *IC* を用いた。また、校訂記号のうち ( ) は書写者による省略を表す。

\*2 Buck, 67–68; Lejeune, 131.

x), (d) -s λ-> -λ λ- (3 x), (e) -ν π-> -μ π- (3 x), (f) -ν μ-> -μ μ- (5 x)\*<sup>3</sup>。ただしこれらの組み合わせであれば必ず外連声が起こるわけではない。外連声が起こるのは主に (1) 定冠詞と名詞\*<sup>4</sup>、(2) 前置詞と名詞、(3) 何らかの単語と μέν、(4) 何らかの単語と δέ から成る単語群の内部の場合である\*<sup>5</sup>。またこれらに加えて (5) 何らかの単語と定動詞から成る単語群の内部でも起こると考えられる。例：ὁ ἀνεὸς δοῖ «夫が与える場合」(IC IV.72.III.20, 29)、ὁ πατεὶρ δοῖ «父が生きている場合」(IC IV.72.VI.2)\*<sup>6</sup>、πατε(ρ) δοῖ «父が生きている場合」(IC IV.72.IX.41)、το μειονος ἐν(δ), δικάδδετο «それ以下の場合には 1 人が証言し、(裁判官が) 判決を下すこと」(IC IV.72.IX.50)、τιλ λει «誰かが望む場合は」(IC IV.72.X.33-34)\*<sup>7</sup>。ゴルテュン方言以外にも例がある。例：δ]οκιμωτατος ἀστωγ | κε(ι)ται «市民たちの中でもっとも優れた者が眠っている」(CEG 172.1-2, ex Apollonia Pontica, c.490 a. Chr.)。

したがって ὀμνυς κρινετο «宣誓した上で裁定せよ」(IC IV.72.IX.21, cf. IV.101.2) ではこれらが単語群を成し、\*τους καδεστανς > τος καδεστανς の場合と同様に、\*ὀμνυς > ὀμνῦς のように ν の脱落が起こっていると考えられる。一方で στατερανς καταστασει «〇〇ステアテルを支払うこと」(IC IV.72 に 8 例、IV.46 に 2 例、cf. IV.74.2) においては、定動詞が後続しても ν は脱落していない\*<sup>8</sup>。一般に前置詞の前では外連声が起こらないから、これは後続する合成動詞の定動詞とは単語群を成さないためと考えられる。

ゴルテュン方言で外連声が起こる主な条件が前述の (a-f) と (1-5) であるとした場合、語末の -νς に含まれる ν が、子音で始まる語が後続した場合でも脱落しない場合が多いことが容易に説明できる\*<sup>9</sup>。まず、複数対格の曲用語尾 -νς に含まれる ν が脱落するのはほぼ定冠詞に限られる\*<sup>10</sup>。また能動態現在分詞と能動態アオリスト分詞の男性単数主格の曲用語尾 -νς (< \*-ντς) に含まれる ν は、次の語が母音で始まる場合はもちろん、子音で始ま

\*<sup>3</sup> かつこ内の数字は IC IV.72 での出現回数である。

\*<sup>4</sup> 定冠詞のアクセントについては Probert, *Guide*, 139-140 に簡潔にまとめられている。

\*<sup>5</sup> したがって外連声を考える場合、Bile, 128-129, 132-134 のように後続するのが母音か子音か、あるいは文末かを考えるだけでは不十分である。

\*<sup>6</sup> クレータ島では ζ の文字を用いず δ の文字で表すから、δοῖ (: δωω «私は生きる») はイオーニア方言の ζώω に対応する (LSJ s.v. ζῶω)。

\*<sup>7</sup> 同じ子音が 2 つ続く場合、古典期以前にはただ 1 つの文字で書かれることがあり、これは単語間で同じ子音が続いている場合でも起こる (Wachter, *Vase*, 232)。したがって、たとえば πατερδοῖ と書かれていれば、これは πατερ δοῖ を表していると考えられる。このような場合、δ が 1 つ省略されて表記されているとみなし、πατε(ρ) δοῖ と表記した。

\*<sup>8</sup> ゴルテュン方言では子音幹の第 3 曲用名詞の複数対格は第 1, 2 曲用からの類推により -ανς となる。Bile, 196 を見よ。

\*<sup>9</sup> たとえば δυο μοιρανς γεκαστον «それぞれの者が 2 つ分の分け前を」(IC IV.72.IV.41)、τος καδεστανς τος ... (IC IV.72.VII.43-44) では ν が脱落していない。

\*<sup>10</sup> λεβητας «釜を」、τουτος «それらを」では後続する語に関わらず脱落するのがふつうだが、単語に限られていることからおそらく定型的な形態である (Bile, 128-129)。

る場合でも脱落しないのがふつうである。例：ἐ καταθευς ἐ「あるいは担保とした場合、あるいは」(IC IV.72.VI.19)、ἐ καταθευς τοι πριαμενοι (IC IV.72.IX.11-12)、ὁ καταθευς, μεδ' (IC IV.72.X.27)。

外連声の例より、古典期以前のゴルテュン方言では単純動詞の定動詞は前接する語と単語群を成す一方、複合動詞の定動詞は単語群を成さないと考えられる。したがって前者の場合は定動詞とその前の語の間に3子音の単純化が起こる可能性があるが、後者の場合は起こらない。これはゴルテュン方言のアクセントと古インド語のアクセントを比較することによっても確かめられる。古インド語において主文の定動詞は次のようになっている。まず単純動詞の場合は基本的にアクセントをもたず\*11、前接辞と同様の性質をもっている\*12。一方、複合動詞の場合は前置詞にアクセントが置かれる。これはゴルテュン方言において、定動詞が前に置かれた語と単語群を形成するかどうかと対応していると考えられる。したがって以上で論じたゴルテュン方言の定動詞のアクセントと、アクセント上ひとまとまりとなっている単語群に関する性質はギリシア祖語から継承されたものであると言える\*13。

(東京大学)

## 参考文献

- Bakker, E. J. (ed.), *A Companion to the Ancient Greek Language* (Chichester, 2010).  
 Bile, M., *Le dialecte crétois ancien* (Paris, 1988).  
 Buck, C. D., *The Greek Dialects* (Chicago, 1955).  
 Glare, P. G. W. (ed.), *Greek-English Lexicon: Revised Supplement* (Oxford, 1996).  
 Guarducci, M. (ed.), *Inscriptiones Creticae, iv, Tituli Gortynii* (Roma, 1950).  
 Hansen, P. A. (ed.), *Carmina Epigraphica Graeca Saeculorum VIII—V a. Chr. n.* (Berolini, 1983).

\*11 Macdonell, 81, 106-107.

\*12 ギリシア語でも定動詞が前接辞と同様の性質をもっていることが間接的に示され得ると考えられる。まず、Wackernagel が主張し一般に受け入れられているように、定動詞が一般に語頭寄りアクセント (recessive accent) となるのは、制限法則 (law of limitation) が導入されたため、すなわちアクセントの置かれる位置が語末から3音節以内に制限されたためと考えられる。つまり、定動詞はもともとアクセントをもたなかったが、制限法則が導入されるとある一定以上の長さの語では語末に無アクセントの音節が連続することが許されなくなり、前接辞となる代わりに語頭寄りアクセントとなったというものである。以上については Probert, *Ancient Greek Accentuation*, 86-87 が簡潔にまとめている。また、歌詞につけられた旋律の中で定動詞の部分には低い音が割り当てられている場合があり、これは定動詞がアクセントをもたないことと関係がある可能性がある (Wachter, 'Accent', 128-129)。

\*13 査読者から数々の有益な指摘をいただいたことに感謝申し上げたい。もちろんそれでもなお誤りや不備が残っていれば、すべて私の責任である。

- Lejeune, M., *Phonétique historique du mycénien et du grec ancien* (Paris, 1972).  
 Liddell, H. G., Scott, R., and Jones, H. S. (eds), *A Greek-English Lexicon*<sup>9</sup> (Oxford, 1940).  
 Macdonell, A. A., *Vedic Grammar* (Strassburg, 1910).  
 Probert, P., *A New Short Guide to the Accentuation of Ancient Greek* (London, 2003).  
 ——— *Ancient Greek Accentuation* (Oxford, 2006).  
 Rau, J., ‘Greek and Proto-Indo-European’, in Bakker, 171–188.  
 Wachter, R., *Non-Attic Greek Vase Inscriptions* (Oxford, 2001).  
 ——— ‘Accent, Sentence Intonation, and Music in Lesbian Dialect Poetry’, *InL* 29 (2006), 127–136.  
 Willetts, R. F. (ed.), *The Law Code of Gortyn* (Berlin, 1967).